

学位（博士）論文要旨

看護学専攻	理論看護学 基礎看護学教育研究領域	学籍番号	0533002
		氏名	高木 真理
論文題目	窮地に陥っているがん患者とのパートナーシップに基づく 看護実践方法論の発展		
<p>Keywords: がん看護、ナイチンゲール看護論、科学的看護論、ニューマンの健康の理論、パートナーシップ、看護実践方法論</p> <p>本研究の目的は、窮地に陥っているがん患者とのパートナーシップに基づく看護実践の過程的な内部構造を明らかにし、実践に役立つガイドラインを導くことである。これまで、実践した看護師個人にとどまり、社会化されることがなかった、このケアの構造が明らかになれば、窮地に陥っているがん患者のケアに戸惑う看護師らの実践を導く方法論の発展につながり、多くの患者の助けとなると考える。</p> <p>ナイチンゲールの看護一般論は、未だ解明されていないあらゆる看護現象を内包するはずであるという考えのもとに、理論的枠組みには、窮地に陥っている患者のケアを導く、ニューマンの『健康の理論』を、この看護一般論に重ねた。研究方法には、ナイチンゲール看護論を継承発展させた科学的看護論に基づく学的方法論を適用した。研究対象は、窮地に陥っているがん患者と看護師との一連の看護過程である。患者と看護師のパートナーシップに基づく看護過程における、患者の変化につながる関わり場面と、看護過程の展開につながる看護師の判断場面をデータとし、科学的抽象法を用いてそれらの分析を行った。まず、場面ごとに「関わりの意味」を取り出し、そこから「看護の論理」を抜き出し、次に、時系列に並べた「看護の論理」の連関を踏まえて、窮地に陥っているがん患者の「看護の特徴」を一連の過程として抽出した。さらに、それらを見渡して、看護過程全体における変化の局面を特色付ける一連の「看護の性質」を抽出し、窮地に陥っている患者とのパートナーシップに基づく看護実践の過程的構造とした。この構造から、各状況に応じた看護師のケアの目的、判断、行動が見えるように、看護師の認識と表現を引き出し、ガイドラインとして表現した。</p> <p>結果として、孤独で常に苛立っていた一人のがん患者が、動揺を繰り返しながらも、やがて幸福感に満たされて死を遂げるまでの看護師との関わり過程における意味ある 25 場面から、それらの場面での看護のあり様とその意味内容の連関を踏まえて 14 の看護の特徴が引き出され、それらの看護過程には4つの転換の局面が取り出された。その局面ごとに、窮地に陥っているがん患者の一連の看護に特有な看護の性質、すなわち、‘患者と看護師のゆるぎない関係性の創出(局面1)’、‘患者の自己像が転換され、“いま”を生きる自分を受け入れることへの支援(局面2)’、‘繰り返し揺れ動く患者に寄り添い、“いま”を生きることへの揺るがぬ支援(局面3)’、‘人生の意味を悟り、納得と満足に満ちたすべての調和への支援(局面4)’が抽出された。これらの4つの看護の性質は、別々に切り離されたものではなく、時の経過とともに最初の性質は巻き込まれて次の性質へと開かれていく、らせん状の拡張をあらわすものであった。この4つの局面における看護実践を導くガイドラインは、局面ごとにその看護の性質を導く3つの支持局面に連なる形で引き出し、結果として12の内容からなるガイドラインを案として提示した。</p> <p>本研究により、未解明であった、窮地に陥っている患者のケアという看護現象の意味が明確になり、その実践のガイドライン案が提示されたという結果は、がん患者のケアを導く実践方法論の発展に貢献し得るということができる。</p>			

指導教員氏名（自署）：

遠藤 恵美子

別紙様式第 10 号

平成 20 年 2 月 12 日

宮崎県立看護大学大学院

研究科長 薄井 坦子 様

学位論文 (修士・博士) 審査委員

主査 氏名 (自署) 遠藤 恵美子

副査 氏名 (自署) 薄井 坦子

副査 氏名 (自署) 赤澤 誠

副査 氏名 (自署) 山岸 仁美

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文 (修士・博士) の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名	高木 真理	学籍番号	0533002
看護学専攻	理論看護学	指導教授氏名	遠藤 恵美子
成績 評価	学位 論文	最終 試験	合 格
論文 題目	窮地に陥っているがん患者とのパートナーシップ に基づく看護実践方法論の発展		
審査 要 旨	<p>予備審査において、窮地に陥っているがん患者の日常の看護ケアの中に、「健康の理論」に基づく看護師とのパートナーシップのケアを入れ込んで実践し、患者が自己組織化していく四つの局面との関連で、看護師の関わりのあり様を、学的抽象法を用いて過程的内部構造として抽出した点が高く評価された。しかし、その関わりが汎用されるためのガイドライン作成が課題となった。</p> <p>本論文審査では、提示されたガイドライン案が、看護師らに活用されるためには、より対象理解の必要性が指摘され、実践の中で検証しながら仕上げていくことが、今後の課題とされた。</p> <p>本論文は、がんの告知、再発、逃れようもない死などによって窮地に陥る患者が多いがん看護実践において、未解明な看護現象への看護ケアの実践方法論に注目した点で理論看護学上意義があり、がん看護実践への貢献度も高いと認められる。</p>		